日本漢詩の世界

土屋（つちや）　博（ひろし）

一「本朝絶句評釋」文學士久保天隨著
（東京文學館、明治三十五年刊、正價金十八錢、九六頁）
十七家、七十六首を收錄す。うち八首は賴山陽、六首は梁田蛻巖。次いで五首は絶海、物徂徠、菅茶山、廣瀨淡窗、梁川星巖、藤井竹外、森春濤、丹羽花南、成島柳北、竹添井々の各氏。

二「日本正氣詩選　完」男鹿部朝陽編選
（藍外堂書舗、明治四十四年刊、正價金四拾錢）
七百餘家の詠賦、長篇短篇九百四十餘首を收錄す。

三「本朝名家詩文」文學博士岡田正之・文學士佐久節　編
（合資會社明治出版社、初版大正六年、大正十年刊三版。本文七六七ページ）
近世大家の手に成る名文よりその精粹を聚む。編者曰く、「青年子弟の讀書力、作文力を養ひ、兼ねて德性と趣味を養ふ料にもと編纂す」と。
内容の一端を幾つか例示せば以下の如し。鹽谷宕陰（幕府の儒官）の「近古史談引」は、「近古史談」（大槻盤溪著）の序文なり。曰く、「憶ふ昔山陽賴氏に京師に從ひしとき、　間（申の刻、午後四時頃）酒に侍し、前古英雄の事蹟を縱譚し以て常となす。」と。
賴山陽の「不識庵機山を擊つの圖に題す」は、上杉謙信（不識庵）の武田信玄（機山）の陣に斬り込みたる際の謙信の心事を詠む。曰く、「鞭聲肅々として夜河を過ぐ。曉に見る千兵の大牙を擁するを。遺恨なり十年一劒を磨き。流星光底長蛇を逸す。」と。安井息軒の「三計塾の記」は、息軒の三計を以て塾名としたる理由を學生に示したるものなり。曰く、「三計とは何ぞや。一日の計は朝に在り。一年の計は春に在り。一生の計は少壯の時に在るなり。何を以て吾が塾に名づけたる。諸生の晏起と春嬉とを慮ればなり。」と。重野安繹の「霞關臨幸記」は、明治天皇の霞關大久保利通邸に幸せられたることを述べたものなり。曰く、「明治九年四月十九日、車駕參議兼内務卿大久保利通の第に幸し給ふ。第は霞關に在り。地勢高爽にして下城市を瞰む。凡そ官署の布置、肆鄽の交錯、燦として眉睫に列る。東南海を望めば、風帆雲鳥、碧波浩蕩の中に出没す。其の灣泊には、則ち歐艦美舶麕至輻輳し、旗章搖搖として日に閃く」と。

四「日本名詩評釋」近藤元精編纂
（大正六年刊、定價八拾錢、本文二九九頁）
上古詩、弘文天皇より阿部仲麿まで。中古詩、平城天皇より釋蓮禪まで。近古詩、藤原定家より上杉謙信まで。近世詩、石川凹より小野長愿まで。

五「新撰　名家詩集　全」

（有朋堂文庫、昭和二年刊、五五〇頁）

例言に曰く、「諸家以没年先後次第之」と。收錄は伊藤仁齋、林羅山、石川丈山より小野湖山までの六十名。

六「興國詩選　皇朝篇」鹽谷溫著

（弘道館、昭和六年刊、定價金參圓、本文五四四頁）

著者鹽谷溫（一八七八年生、一九六二年歿）は、漢學者鹽谷青山の子息として東京に生まる。（大叔父は江戸後期の儒者鹽谷宕陰。）東京帝國大學漢學科卒業ののち、ライプチヒ、北京等に留學し、一九二〇年東大教授。序に曰く、「余曩に獨逸學生會の詠吟集に倣ひ皇漢名家の詩數百首よく人口に膾炙せるものを纂めて「學生必吟」を撰し、後改編して訓讀を加へ「朗吟詩選」と稱す。弘道館主人更に之が註釋を下して廣く世に行はんと請ふ。是に於て皇朝と漢土に分ち篇什を增補し解釋評論を施し更に名づけて「興國詩選」といふ」と。用意周到、この種の書籍として決定版と覺ゆ。

七「註解　興國朗吟詩集　皇朝篇」木村岳風編

（桑文社、昭和八年刊、金參拾錢、一二八頁）

題辞は、農林大臣後藤文夫「神振魂叫」、海軍大將荒木貞夫「聲韻振氣」、前文部大臣鳩山一郎「皇風宣揚」、東大教授鹽谷溫「興皇風」。

八「漢詩吟詠　養氣集」二松學舍濟齋道人輯

（静思書院、昭和十一年改訂增補十版、定價金五拾錢、本文一七六頁）

初版は昭和六年。著者山田準は山田方谷の孫娘の婿にして二松學舍の學長を務めたる人物。日本漢詩の代表作を收錄し、携帯に極めて便利。解說は必要最小限なれば、各頁披くに殆ど漢字ばかりなり。七言絶句　菅原道眞「重陽後一日」より山田濟齋まで。五言絶句　菅原道眞「自詠」より山田方谷まで。律體　菅原道眞「九日後朝同賦秋思鷹制」より落合東郭まで。古體　秋山玉山より山田濟齋まで。

九「日本名文鑑賞　漢詩漢文篇」高須芳次郎編著

（厚生閣、昭和十一年刊、三七〇頁）

たとへば、叙事篇には大久保利通「通州を下る」、叙情篇には黑澤忠三郎「絶命詞」、叙景篇には梁川星巖「藍川秋聲」、詠史篇には賴山陽「蒙古來」、雜篇には廣瀨淡窗「桂林莊雜詠」を收錄す。

十「皇朝　朗吟集」國分青厓校閲、三好淩石撰註

（三省堂、昭和十二年二十五版、定價金拾五錢、一〇四頁）

初版は昭和十一年。

十一「日本百人一詩」土屋竹雨著

（砂子屋書房、昭和十八年七月刊、定價貳圓五拾錢＋特別行為稅相當額十五錢、四〇五頁）

著者序に曰く、「百人一詩の選は、足利時代僧横川を初めとし、德川時代初期林羅山の本朝百人一詩、

末期大槻盤溪の「百人一詩」あり」と。本書にては、七言絶句の一體に限り、平安朝より明治末葉までの作家を含み、立意正しく格調整ひ日本精神の遺憾なく發露せるものにして而も難解の嫌なく人心に入り易きもの採用せらる。菅原道眞「九月十日」より乃木希典「金州城下作」までを收錄す。

十二「日本名家絶句抄」紀本繩著
（照林堂書店、昭和十八年八月刊、定價貳圓＋特別行為稅相當額八錢、二四七頁）
自序より、「一億臣民は八紘一宇の肇國精神を昂揚し士氣の旺盛を圖り以て盡忠報國の志を遂行せざる可からず。其の方法多々あるべしと雖も、余は詩に依りてその性情を高潔にし思念を錬成するの適當なるを信ず」と。

十三「日本百人一詩帖」林祖洞著
（碧山房、昭和十八年十一月刊、定價金三圓、五九頁）
土屋竹雨著の「日本百人一詩」に準拠したる書道手本なり。「日本百人一詩」は大東文化學院を中心とする教授たちの選定したるものの由。菅原道眞「九月十日」、巨勢識人「奉和塞下曲」、釋雪村「萱」より、乃木希典「金州城下作」まで。

十四「日本百人一詩帖」
（清雅堂、昭和十九年刊）
松井如流書。和綴。

十五「朗吟詩選」吉村岳城著
（學精社、昭和二十六年刊、定價百五十圓、一六〇頁）
はしがきによらば、昭和十一年に日本藝道聯盟より「朗吟詩選」上中下三巻を世に出すも、その後の戦争、被占領下六年を経て、講和獨立に際會するに當り、精神の復活を期待するものの由。

十六「新釋漢文大系　日本漢詩　上下」猪口篤志著
（明治書院、昭和四十七年刊、合計七六四頁）
二百五拾餘首を收錄す。上巻には大友皇子「侍宴」より吉村重郷「舟至由良港」まで、下巻には佐久間象山「送吉田義卿」より磯部覺太「屋島懐古」まで。

十七「日本　漢詩百選」安藤英男著
（大陸書房、昭和五十二年刊、定價千八百圓、二七〇頁）
著者は一九二七年生れ、の元銀行マン（太陽神戸銀行）にして市井の賴山陽研究家、本書には菅原道眞「九月十日」より德富蘇峰「壬辰新年」までを收錄す。

十八「日本漢詩鑑賞辞典」猪口篤志著
（角川書店、昭和五十五年刊）六一六頁）

著者は明治書院の「日本漢詩」上下（其処には二百五十首程度收錄）の著者。本書にては三百八十首を收錄す。たとへば、鹽谷溫の代表作として「埃及懷古」掲載せらる。

十九「漢文名作選　五　日本漢文」
（大修館、昭和五十九年刊、定價千八百圓、本文二六七頁）
漢詩篇は、釋弁正の「在唐憶本鄕」より土屋竹雨の「芳山懷古」まで約九十首を收錄す。（文章篇には、日本外史、近古史談、言志四錄等の抜粹を收む。）

二十「日本漢詩紀行」渡部英喜著
（東方書店、平成七年刊、定價二千三百圓、二〇八頁）
九州のうた（南洲、淡窗、山陽など）、中國・四國のうた（漱石、子規、細川賴之など）、近畿のうた（茶山、星巖、鐵兜など）、中部のうた（細香、丈山、謙信など）、關東のうた（春臺、虎山など）、東北・北海道のうた（君平、盤溪など）。

二十一「新書漢文大系七　日本漢詩」猪口篤志著
（明治書院、平成八年刊、定價九八〇圓、二四二頁）
新釋漢文大系の簡略版にして、持ち運びに便利なり。

二十二「百人一詩」遠藤鎮雄著
（錦正社、平成八年刊、貳千貳百圓、二三〇頁）
新古書としてすずらん通り錦正社ワゴンにて購入す。土屋竹雨著「日本百人一詩」にて選定せられたる詩を遠藤氏なりに新たに解說したるもの。菅原道眞「九月十日」より、乃木希典「金州城下作」まで。書道界の重鎮なりし田中眞治氏の白文の書附き。

二十三「日本漢詩」（有限會社イーストタウン製作のDVD、絶版）
左大臣光永（學習院大學ドイツ語科中退）の朗讀に合せ、漢字の白文と相應しき自然の景色、畫面に現はる。音樂も邪魔とならず、新時代に相應しき教育法かと覺ゆ。

（令和元年十一月二十五日受附）

《編輯者より／次頁に畫像を附けました。》

日本漢詩鑑賞辞典
猪口篤志
角川書店
日本百人一詩
日本正乳詩選 明叶
日本名詩評釋
近藤元積編纂
新撰名家詩集
本朝名家詩文
興國詩選
中國詩選
盧谷溫選
日本漢詩
下